



TITLE:

エウリーピデース『ヒッポリュトス』の研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

堀川, 宏

CITATION:

堀川, 宏. エウリーピデース『ヒッポリュトス』の研究. 京都大学, 2016, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19438>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により本文は2018-09-01に公開

京都大学	博士（文学）	氏名	堀川 宏
論文題目	エウリーピデース『ヒッポリュトス』の研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、古代ギリシャのいわゆる「三大悲劇詩人」の一人エウリーピデースによる劇作品『ヒッポリュトス』についての、作品の成立と解釈をめぐる研究である。その目的は、当該作品の成立に関する言説を整理して妥当な見方を提示すること、そして作品の検討と解釈を通してより良い作品理解に寄与することである。</p> <p>全体は序論、第1～4章、まとめと結論、文献表からなる。序論では『ヒッポリュトス』に対する本論文の視座、および各章の議論の位置づけと概略が示される。続く第1～4章では、それぞれに設定されたテーマごとに、検討が進められる。設定されるテーマは、(1)『ヒッポリュトス』と失われた同名劇との関係、(2) 神話伝承とは異なる『ヒッポリュトス』に特有の人物造形、(3)『ヒッポリュトス』に見られる劇展開上の工夫、(4) 解釈が分かれる難語αἰδώςの解釈、という4つである。</p> <p>現在『ヒッポリュトス』を研究しようとするとき、もっとも基本的な文献がW. S. Barrettによる注釈書であることは間違いない。それは『ヒッポリュトス』の成立からその作品解釈までを包括的に扱い、この作品についてのもっとも標準的な見方を提示している。本論文が扱う上記の4テーマは、Barrettの議論に不十分な面がある一方で、作品解釈にとって重要性が高いと著者が判断したテーマであり、それぞれが相互に関係しあっている。</p> <p>第1章は、ともにエウリーピデースの手になる二つの同名劇、すなわち現存する『ヒッポリュトス』と失われた『ヒッポリュトス』との制作順序を検討対象とする。検討の結果は、失われた劇を内容的に問題を抱えた第一作、現存する劇を内容が改善された第二作と捉える従来からの説を支持する一方、改作の動機を失われた劇が持っていた欠点の修正に求めるこれまでの見方には疑義を示した。比較的最近まで無批判に受け容れられてきた制作順序に関する従來說は、資料の信頼性が低いことから、逆の制作順序の主張も近年になって現われているため、本章はあらためて古代の証言を詳細に検証した。ここでは、議論を進めるために論拠の信頼性を見定める試みがなされた。そのため、この問題を論じる際に言及されることの多い二つの資料についての検討が、補論として付されている。</p> <p>第2章は、『ヒッポリュトス』の作品構想について、ヒッポリュトスとパイドラーという二人の主要登場人物の人物造形という観点から論じる。この議論のためには、本作品以前におけるヒッポリュトス関連諸伝承を調べるのが不可欠だが、それを直接伝える資料は現存しない。そこで本研究は、『ヒッポリュトス』と同じ物語パターン</p>			

に属する伝説との比較、喜劇作品でのパイドラへの言及の検討、失われた『ヒッポリュトス』に由来する断片資料の検討などを通して、まずは『ヒッポリュトス』以前における伝説の姿を、可能な範囲で推測する。そのうえで、それを現存する『ヒッポリュトス』と比較し、本作品の構想の中心をパイドラの人物造形の改変に求める。すなわち、以前は自身の恋をみずから積極的に推し進める「悪女」として伝説に現れていたパイドラが、本作品ではそれと対照的に、評判のよい貴婦人として導入される。この改変に伴って、本作品には劇を動かす根本的な原因として、劇の冒頭に女神キュプリス（アプロディーテー）が登場することになる。

もう一人の主要登場人物であるヒッポリュトスについては、処女神アルテミスとの関係が特徴的である。この女神は本作品にキュプリスに対立する女神として現れ、その対立関係はこの作品の構造を強く規定している。ヒッポリュトスはアルテミスの特別な信奉者として、いわば必然的にキュプリスに対立することになり、そのことが彼に対するキュプリスの怒りという、この劇の動因を提供している。このような見通しのもと本章の議論は、この劇におけるヒッポリュトスを性格的に欠陥を持った「異常者」と捉えるよくある見方を批判しつつ、彼の描かれ方を確認してゆく。それによって、この作品におけるヒッポリュトスが、通常の人間のレベルを超えた美しさを伴っていることが確認される。

第3章では、『ヒッポリュトス』において繰り返しなされる「この日」への言及と、劇展開との関係が論じられる。「この日」への言及（いわゆる“this day motif”）はギリシャ悲劇の諸作品に広く見られる定型的な表現であり、他の悲劇作品との関係で論じられることはあるものの、『ヒッポリュトス』との関係で論じられることはこれまでなかった。本章の議論はこの状況を一步進めることを意図し、当該表現について、劇が次の段階に展開する重要なポイントのそれぞれに配されていることを確認したうえで、劇展開に果たす役割を考察した。すなわち、この表現は、劇を展開させている根本的な力がキュプリスであることを観劇者に意識させることを意図していると論じられた。第2章で示したように、この劇では、それ以前の伝承と異なり、パイドラの恋を積極的に推し進める——つまり、劇展開を動かす——のがパイドラ自身ではなく、キュプリスであり、当該表現はこの劇構想の提示に与っていると考えられた。

第4章では、パイドラのいわゆる「大スピーチ」の冒頭部分に現れるαἰδώςという語の解釈について論じられる。この語を含む冒頭部分は『ヒッポリュトス』における難読箇所として有名であり、その解釈は論者によって様々である。この問題に対して本章の議論は、これまでに主張されてきた読み方の問題点を確認したうえで、問題の語をἔρωςの換喩表現と捉えるE. M. Craikの提案に、この換喩表現によって意味される事柄の補正と、表現の意図を文脈との関係で緊密化するなどの必要な修正を加えて再提案し、それを出発点として、スピーチ全体に対して冒頭部分が果たしている役割を

明らかにする。その役割とは、パイドラーがまさに直面している状況について語りながら、同時にその状況に身を任せることを許さない彼女の分別を示すことで、このスピーチにおける彼女の主張を支える概念にスピーチの焦点を合わせるという役割である。なおこの箇所には、問題のαἰδώςの他にも、論者によって解釈が割れていて、しかもそのどの解釈も事態を正しく捉えていないと判断される表現（具体的には382-3行の ἡδονὴν ... ἄλλην τιν’ という表現）がある。そこで、この表現についてこれまでの解釈の問題点を指摘し、それらの問題点を克服しうる新たな解釈を提案する議論が「補論」として付されている。

(論文審査の結果の要旨)

エウリーピデースの悲劇『ヒッポリュトス』は、ヒッポリュトスとパイドラーをめぐる伝説に取材した詩人の代表作の一つである。テキストの保存状態は比較的良好で、劇としての構造や展開も、一見したところけっして難解な作品ではない。それにもかかわらず、この作品についての解釈は必ずしも一定でなく、今日に至るまで盛んに論じられている。とりわけ、作品の成立、および、主要登場人物であるヒッポリュトスとパイドラーの人物造形をめぐって学者間に意見の相違が大きい。本研究はこれらの問題を再検討し、作品理解に貢献しようとする。その議論の成果は以下の通りである。

失われた『ヒッポリュトス』との制作順序をテーマとする第1章では、失われた劇を第一作とし、現存する劇を第二作とする従来の見方が支持されている。この結論自体に新しさはないが、その結論を導く過程で関連する古代の証言の信頼性を批判的に検討すると同時に、研究者のあいだで錯綜する見解を整理したことは、作品理解への確かな足場を提供した点で有益である。

第2章は現存する『ヒッポリュトス』の作品構想をパイドラーとヒッポリュトスの人物造形という視点から論じる。本作品が関連する先行伝承に依拠していることは間違いないが、先行伝承を直接伝える資料は現存しない。それでも、本作品に描かれるパイドラーが評判のよい貴婦人として描かれる点で、それ以前と大きく異なることについては疑いがない。本章は、この新たなパイドラーの人物造形が作品全体に果たした働きを具体的に示した。第一に、愛の女神キュプリスが劇の冒頭に現れ、パイドラーに代わる劇展開の主導因として提示されること、第二に、この女神と、この劇に現れるもう一人の女神アルテミスとの間の構造的な対照関係の上に、アルテミスの特別な信奉者たるヒッポリュトスとキュプリスとの敵対がほとんど必然的な関係として設定されること、である。そこから、この作品におけるヒッポリュトスは、よく言われるような「異常者」としてではなく、人間のレベルを超越した美質を持つ存在として把握されうることが論じられている。

第3章では、古代ギリシャの文学作品によく見られる「この日」への言及が、本作品の劇展開に果たす役割として、それが劇の要所に配され、それぞれ劇展開の主導因であるキュプリスの力を提示することが論じられた。本章の議論は、第2章で示されたような、新たなパイドラーの人物造形と、その上に築かれた作品構想に与る表現としてこの言及を捉えた点で意義が認められる。

第4章の議論は、本研究のなかでもっとも挑戦的である。論じられるのは本作品における有名な難読箇所についてであり、しかも本章が主題とするαἰδώςという語は、それ自体として把握が難しい。この難問に対して本研究は、それをἔρως（すなわち性愛）の換喩表現と捉えるE. M. Craikの議論を下敷きにして、この換喩表現によって意味される事柄の補正と、表現の意図を文脈との関係で緊密化するなどの必要な修正を加えることによって説得的な議論を展開している。問題の語をそのように読むことによ

て、パイドラのスピーチは、たしかに明確な方向性を獲得することになる。

このように、本研究は、テキストの精密な検討に基づいて、エウリーピデースの悲劇『ヒッポリュトス』に関わる諸問題を論じた。論者の議論は堅実であり、一定の説得力を有する。その一方で、論じられた作品構想や人物造形によって作品全体にくまなく配慮が行き届いているとは必ずしも言えない。また、エウリーピデースの他の作品との劇作上の関連、あるいは、『ヒッポリュトス』の後世における受容の問題など、広く目を向けるべき場所があり、課題は残されている。ただ、課題は論者も認識しており、今後の展開が期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成28年2月16日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。